
月が見つめる雪

和田梨樹

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

月が見つめる雪

【コード】

N3141B

【作者名】

和田梨樹

【あらすじ】

ある雪の降る夜、青年は願いを叶えてくれると言う少女に出会う。
青年の願いとは、いつたい…？

（前書き）

この小説は企画小説です。『雪小説』で検索すると、他の雪小説を読むことが出来ます。読んでみてください。

読む前に、この小説のジャンルが自分で良くわかっていないので、誰か教えて下されば嬉しいです。

「うわ、雪降ってやがる」

さかきりょうた
榊涼太は、顔をしかめて言った。

彼はコンビニのバイトが終わり、これから帰るところだった。時刻は19時20分。現在位置、バイト先である駅前大通りのコンビニ。
二。

車通りも激しく、オレンジ色の街灯も点いていて、非常に明るい。彼は自宅に向け歩きだした。

「はあ…帰ったら、レポートも書かないとな……」

いかにも面倒くさそうに呟いた榊涼太は、二十歳の大学2年生。成績はそこそこで、『可』を取ったことは一度もなかった。サークルには入っておらず、毎日をバイトしつつ、1人で気楽に生活している。

家族は彼を養子にした義父と義母の2人しかおらず、彼は本当の両親の顔を知らない。無理もないだろう。施設に預けられたのは、彼がまだ一歳の時のことだった。その頃の記憶がある方が珍しい。

「そういえば…あの日も…雪だったんだよな……」

涼太がボソツと呟いた。あの日は、もちろん両親に捨てられた日である。彼はその日のことを義父に聞かされた……

……ある雪の降る真夜中、児童擁護施設『ホタルのすみか』の玄関のインターホンが鳴った。

偶然にも、所長がその日残業で徹夜していた。所長が玄関を開けると誰もおらず、足下から泣き声が聞こえた。下を見ると、そこにはバスケットに入っている小さな赤ん坊がいた。それが涼太だった。その後、涼太はそのまま『ホタルのすみか』に引き取られた。彼は小学四年までの時間をそこで過ごした。

彼を引き取ったのは、子供を作ることの出来ない若い夫婦だった。

夫婦は涼太を高校まで世話をした。夫婦は大学まで世話をするつもりだったのだが、涼太はそれを丁重に断った。彼は義夫婦にこれ以上、世話になりたくなかったのである。

話し合った結果、彼は一人暮らしをすることになった。家賃などはバイト代から払い、敷金は義夫婦が払った。敷金も彼が貯金から払う予定だったのだが、夫婦が払うと言ったため、涼太はそれを有り難く受けることにしたのである。そして2年が過ぎ、現在に至るという訳である。

「つと、メールだ」

涼太は義母に無理やり持たされた携帯を、ポケットから取り出しメールを確認する。

「優子からか」

優子とは、涼太が現在付き合っている女性で、本名は鳴原優子なるはらゆうこといい、彼の同級生でもある。

優子と付き合い始めたのは、高校一年の時、涼太がまだ義夫婦の元で暮らしていた頃のことだった。

そして現在、優子は親元から涼太の家へ、毎日通っている。同棲を許して貰えなかった優子が、通い妻という形で、涼太を支えているのである。

ちなみに二人は大学を卒業したら、結婚する約束をしている。お互いの親も認証しており、後は大学を卒業するだけだった。

そんな優子が送ってきたメールの内容はいつも通り、今から家に来るといったものだった。

「んじゃま、さっさと帰りますかね」

そう言いつつも、涼太は歩き出した。ここまで来たら、家はもうすぐなので走る必要はない。途中、公園を通りがかった。ここを抜けていくと、少し早く家に着く。

「公園、通ってくか」

涼太はただなんとなく公園を通ることにし、中に入ってしまった。

枯れた並木道を通る涼太。電灯は点いてはいるが、昼並みの明るさはもちろんない。まあ女性ならば、一人歩きは遠慮したい場所だった。

だからだろう。榊涼太がその少女のことが気になったのは。

彼女は並木道にあるベンチに一人座り、俯いていた。涼太はなんとなく気になり、足を止める。

「子供が出歩くような時間じゃないのに……何してんだ？」

そう呟いた涼太は少女に近寄り、なんとなく話しかける。

「おい、こんな時間に何してんだよ？」

少女は顔を上げる。見た目は小学生で、これで大人だということ、漫画ぐらいしかありえないだろう。

「子供がうるつく時間じゃないぞ。さっさとお家に帰りな」

涼太は少女に優しく言った。しかし少女は立ち上がる気配がない。

「おい、お前。こんなところにいたら、変なおじさんに襲われるぜ？ 早く帰れよ」

涼太は少し厳しい声で言い、少女の腕をつかみ立たせようとした。しかしつかんだ瞬間、異常なほど冷たい肌に驚き、手を離す。少女が口を開く。

「あなたを、待っていました」

「俺を……待っていたって……？」

涼太は再び驚く。しかし、彼女は涼太の言葉を無視して、さらに続ける。

「あなたは今、叶えてほしい願いはありますか？」

涼太は絶句した。この少女は何を言っているのか、と言うような表情で。

「ああ、私は変な宗教団体の人じゃありませんからね」

「……………」

どうでもいいことを言った少女に、呆然とする涼太。
そんな中でも、雪はしんしんと降り続いていた。

「で、連れて帰ってきちゃったんだ」

「ああ」

涼太は優子に、少女を自分の家に連れてくるまでの経緯を話した。
あの後、優子のことを思い出し、一人で家に帰ろうとした涼太だ
ったが、少女をその場に残して行くのは忍びないと思い、一緒に連
れていったのである。

ちなみに少女は現在、床に座ってヒーターの近くで暖まっていた。
「というか、涼ちゃん、犯罪者に見えたよね」

確かに、小学生ほどにしか見えない少女を、部屋に連れ込むとい
う行為は、犯罪にしか見えない。

「自分でも軽く犯罪っぽいと、思ってたさ」

「軽くどころか、完璧に犯罪者だよ」

優子は断定するように言う。涼太も流石に黙っていなかった。

「おいおい、一応彼氏を信用してくれよ。悲しくて涙が……」

「ああ、よしよし。泣かないの」

涼太は優子の膝枕で寝つ転がっていた。そんな涼太の頭を優子の
手が優しく撫でる。……彼らは俗に言う、バカップルだった。

そんな様子を冷やかな目で見つめる少女。2人はその目線に気
づき、慌てて姿勢を正す。そして涼太は少女に話しかける。

「暖まったか？」

コクリと頷く少女。涼太はそれを聞いて、再び口を開く。

「名前、教える。このままじゃ、語り部が語りづらいだろうが」

語り部の気持ちを代弁した涼太に感謝しよう。…っと、個人的な
感情が…

まあ、そういうわけで少女は名を名乗った。

「…私は、三上紗耶みかみよやといます」

「紗耶か…、よし、じゃあ住所は？」

「……………」

涼太はそう訊いたが、紗耶はそれには答えない。優子が涼太の耳元で小声で言う。

「たぶん、言いたくないんだよ。とりあえず、紗耶ちゃんが言う気になるまで待とうよ」

涼太は頷き、紗耶とさらに会話を続ける。

「何で紗耶は公園に居たんだ？」

「あなたを…待っていたんです」

「願いを叶えるために？」

「ええ、そうです」

涼太と優子は訝しげに紗耶を見た。紗耶はそんな二人を見ると、おもむろに立ち上がり言った。

「じゃあ証拠を見せましょう。優子さん、あなたの願いを、何でも言ってみてください。私が叶えますから」

「願いつて、そんな簡単に叶えてもいいのか？」

涼太は疑問を口にした。紗耶は、

「ルールを守ってるので、大丈夫です」

と疑問に答える。…ルールとは何なのか……ただ涼太はそのことが気になった。

すると、実験台となる優子が涼太を見ていた。

「付き合ってやれよ」

涼太は優しく言ってやった。

それを聞いた優子は少し考えてから、紗耶に願いを告げた。

「私は死んだおばあちゃんに、逢いたい」

死んだおばあちゃんって……

「鳴原今日子、享年72歳。一昨年の夏に、脳梗塞で亡くなっていますね」

二人は驚いていた。高校三年の夏、確かに優子の祖母は脳梗塞で亡くなっていたからである。

だからといって、紗耶の言っていることを信用したわけではなかった。

「では、逢わせてあげましょう」

不意に、周りの空気が変わった。ピンと張りつめた空気。何か起こりそうだと、涼太が思った瞬間だった。

涼太と優子はベッドの傍らに、誰か立っていることに気がついた。その人物の顔を見た時、二人は背筋が凍った。

「あら、二人とも。久しぶりね」

それは、死んだはずの今日子だった。

涼太が今日子と初めて会ったのは、高二の時だった。涼太は優子に招待され、彼女の家に行った時に、二人を出迎えたのが今日子だった。涼太は出会った時のことを、今でも覚えている。今日子は初対面の涼太に、

「あら、優子の彼氏さんかしら。優子もなかなか男を見る目が高いわね。ああ、そうそう。今日、優子の部屋に泊まってってもいいからね。早く孫の顔が見たいからねえ」

こう言ったのである。涼太は赤面して、同じく顔の赤くなった優子とともに、優子の部屋に向かったのだった。

まあ…ちなみにだが、涼太はその日、自宅に戻らなかったそう。

その後、涼太と今日子は、本当の孫と祖母のように話したりしていた。涼太も今日子のことを、本当の祖母のように思っていた。

しかし、今日子は呆気なく亡くなってしまった。最後に聞いた言葉も、涼太は覚えていた。

「…私は…逝くけど、ね。優子の…ことを…幸せに、して…おくれよ……」

涼太はその言葉を聞いた時、泣いた。ただ悲しかったのだ。優子も泣いていた。そして30分後、今日子は息を引き取ったのだった。

しかし現在。今日子は涼太の部屋にいる。高校2年の頃と同じ、元気な今日子が、そこにいた。

「なんだい、二人とも。私の顔を忘れたの？」

今日子は残念がる。涼太は確認するように訊く。

「今日子…婆ちゃんなのか…？」

「当たり前さ、涼太。アンタも元気そうだねえ」

今日子はカラカラと笑いながら言った。涼太は紗耶の方へ振り向く。彼女はしてやったりといった表情でこっちを見ていた。

涼太はこの少女が、嘘を言っていなかったことを理解した。願いが…叶ったのだ。

「おばあちゃん！」

優子は、死んだ祖母に泣きながら抱きついていた。

「おやおや、優子はこんなに甘えん坊だったかね？」

今日子は懐かしげに言う。優子は、おばあちゃん、おばあちゃん、と何度も涙ながらに呟いている。そんな優子を今日子は優しくあやしていた。

「話さなくていいんですか？」

紗耶が横に来て言う。涼太は首を振り、紗耶に言う。

「俺は…いいんだ。婆ちゃんが死ぬ前に、色々話したからな」

「でも…彼女は、後少して消えてしまいますよ」

「それはなんとなくわかってた。…ああ、それでもいい。話すとき、なんか泣いちまいそうだから」

「そうですね…」

紗耶は、今日子と優子に目を向ける。二人はもはや、二人だけの世界に浸っていた。

「つーかさ。あれは邪魔出来ないだろ」

「まあ…そうですね」

そういう訳で、涼太と紗耶は、外に出ることにした。

外に出ると、雪はまだ降り続けつけている。地面に少しだけ積も

っていた。明日は、雪かきをしよう、と涼太は思った。

涼太と紗耶は歩き出す。庭に行こうと思ったのだ。

「寒い…ですね」

紗耶は手を擦り合わせて言う。すると涼太はポケットから、手袋を取り出し、紗耶に渡す。

「……？　これは？」

「使っていていいぞ。俺は寒くないからさ」

「ありがとうございます」

紗耶は笑顔で言い、手袋をはいた。涼太はそれを見て、良いことをした気分になっていた。

やがて庭に着く。そして、紗耶が口を開いた。

「それで…願いは決まりましたか？」

「……………」

涼太は無言で答えた。紗耶はふう、と息をついた後に言った。

「一応、願いは何でも叶いますから、迷うのも無理ないです。決まったら、教えてください」

涼太は願いを真剣に考えることにした。

まず、涼太は自分の欲しい物を考えた。しかし、すぐに止めた。物は金を貯めれば、手に入るのに気づいたのだ。

次に優子のように、逢いたい人に逢うのはどうか考える。涼太は本当の両親を思い浮かべた。

「ああ、そうそう。あなたの本当の両親に逢うことも、もちろん可能ですよ」

涼太の考えが解るかのように言う紗耶。

「そうか、逢えるのか……」

涼太は嬉しげに呟く。しかし、すぐにその表情は変わり、また、真剣に考え始めた。

10分後、涼太は紗耶を呼んだ。

「決まったんですか？」

「ああ、決まった」

「では、改めて訊きます。あなたの願いは何ですか？」

涼太は自分の願いを告げる。

「俺の願いは……」

「ただいま」

「お帰りなさい、涼太」

涼太が部屋に戻ると、そこには優子だけしかいなかった。

「今日子婆ちゃん、帰ったんだな」

「うん」

優子は明るく頷いた。涼太はホツとする。今日子が帰っていったため、暗い気持ちになっっていないかが心配だったのである。

「ん？ 紗耶ちゃんは？」

「願い叶えて、帰りやがった」

涼太の願いを叶えた後、紗耶はこう言い、涼太の手袋をはいたまま、その場で姿を消した。

「私はそろそろ、空に帰らないと行けないのです」

涼太は、紗耶は天使だったのでは、と考えた。しかし、天使であろうと、なかるうと、良太はどちらでもよかった。

「願い、何にしたの？」

「……教えねえよ」

涼太はそっぽを向く。優子は不服そうに言う。「ねえ、教えてよ」。何でもしてあげるからさ」

それを聞いた涼太は、ちょいちょいと手で優子を呼ぶ。優子が寄っていくと、涼太は優子にキスをし、驚いている優子に言った。

「これからも、一緒にいような」

「……うん！」

元気良く、優子は応えた。

そして二人は、寝室に入ってしまった。……まあ、愛でも確かめ合
うんでしよう、たぶん。

ああ、そういえば涼太の願いは、このようなものだった。

「俺の願いは、俺の大切な人や、周りにいる人が、いつも幸せでい
てくれることだ」

紗耶は不思議そうな顔で訊く。

「…自分のことじゃないんですね」

「ああ。俺が努力すれば、金も手に入るし、本当の両親にも逢える。
でもよ…周りにいる人達、全員を幸せにすることは、俺には出来な
いからさ」

「…わかりました。では、あなたの願いを叶えましょう」

紗耶の周りが光り出し、周囲が暖かい光に包まれ、光があちこち
に散っていった。

「…これで、あなたの願いは叶いました」

紗耶は笑顔で言った。涼太も笑顔になる。

雪は既に止み、代わりに雲の切れ間から、満月が顔を出した。そ
の光が、涼太を照らしていた。

本当の両親に逢えなくても、金持ちではなくても、彼はこれから
も生きていけるだろう。

彼は一人ではないのだから。

(後書き)

読み終えた方へ、ありがとうございます。今後とも、頑張りたいと思います。

一応、ジャンルは恋愛ですが、これは違う、といったような意見があれば、遠慮なく作者まで申しつけ下さい。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3141b/>

月が見つめる雪

2009年5月29日04時20分発行